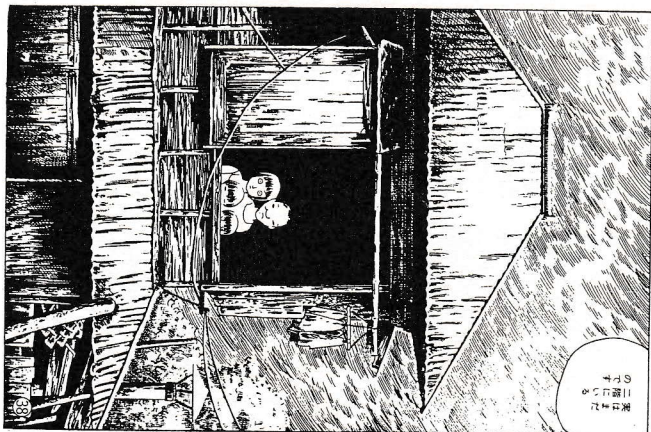
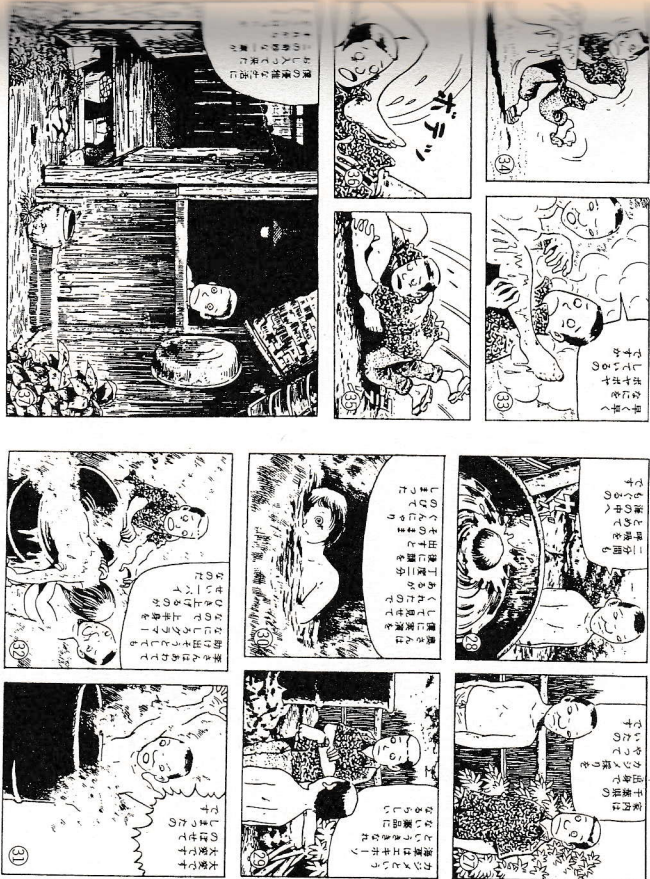
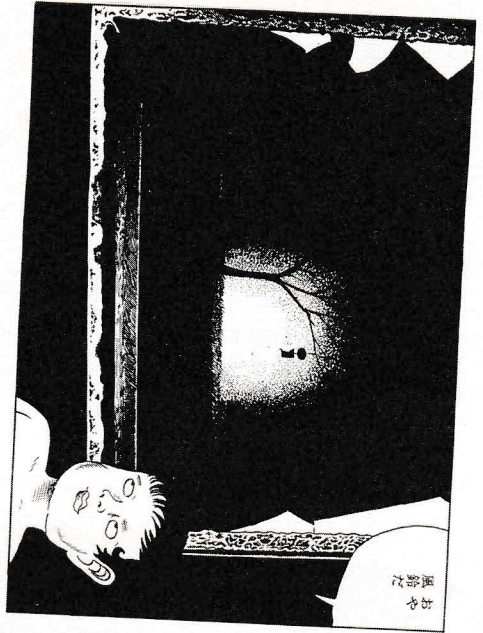


闇の感じ―内と外

まず最初のページ①から。
 まだコヤシの臭いの残る郊外のこのボロ家に引越して来たのは 昨年の初夏だった
 郊外のこのボロ家（二ページ目①）。ボロ家というのは説明しなくてもわかるんですが、コヤシの臭いというのはわかりにくい。夏というのこの植物ではわかりにくいですね。これは植物や自然という感じじゃなくて、不気味にぐじゃぐじゃと生えている。模様のようにでもなく、異様な感じを受けます。
 主人公が画面の中央下において、上を向いている。その目がまた異様です。窓を見ているのか。ところが家には窓がひとつもないんです。構造柱というのか、柱とか樫とか、そういう枠組みだけがあって、そこは雨戸で閉めきつている。ですからあとになるとわかりますが、視線はだんだん内へ向かっていって、内側もぐりこんでそのなかを見たいという欲望の視線です。
 さらに五ページ目⑤、外部から家を見えています。これが同じ構図かどうかというのはいわゆるはわからな
 いんですが、最後のページ⑧にも同じシーンがありますね。
 最初のページ①にもどりますと、武士が閉門を命ぜられたりしたときのような、ななめの板が雨戸に打ちつけられています。つまり内部は真つ暗で、たぶん塵やほこりがいっぱい無残な空き家。ななめの板がはいつていることになにか不吉なことがあるような、そんな感じさせます。
 李さんが外泊することはたびたびで そんな夜はけつして階下へ降りてこようとせず
 という、二階から奥さんが下を見ている図ですね。しかし、奥さんは絵には描かれていません。
 奥さんはたぶん闇の中にいる。電灯がポツとついているだけの闇です（七ページ目⑦）。これ





本文中における丸囲みの数字は、原作マンガ「李さん一家」のコマ数を示す。

近いイメージが「舞台」の大事な小物として出てきます。

は強烈な印象を与えますね。作者の「内部」はホロ家そのもので、しかも「家」は「闇」なんです。

闇の感じは「ねじ式」(一九六七年)のなかでも出てきますが(図1)、これらは内と外の問題だと思えます。内ということは「ツツ」からきているようで、「うつ伏せになる」ということばにだけ残っているんですね。腹這いのおなかで抱えるような、ぬくもりだけをもっているところが、内のイメージで、外というのは戸を立てたところが外なんです。つまり内部性というのはいくもりのある場所だと思っただけですが、つげ義春のマンガでシヨク女のは内というのが決してぬくもりのある世界ではなく、闇で塗りこめられていて死というものと関係あるような気がします。死と闇と性が彼のなかでは一体化しているようで、あちこちに出てくるわけですね。「ねじ式」では産婦人科のお医者さんのところへ行って、ネジでしめてもらうシーンがありますが、これなどはその一体化をよく表現したものだと思えます。

「李さん一家」の二ページ目、コマの②。

いずれ取壊すつもりで放置されていた家なので、々々みたいな家賃で借りられたこのシーンは一階の南側の部屋のようですが、ここは窓枠もなく、雨戸もないところに作者がいる。たぶん作者の自己紹介です。「私」はこういう気分の男です、という感じ。だいたいは戸がはずれているということ。戸がはずれていると、妙なことが内外を問わず起こってくるわけです。映画『無能の人』⁽²⁾でも例の水石の人を訪ねていくと、玄関の戸がガツとはずれました。外に廃材みたいなのが立って掛かってあって、魔材でこの家をつくったんじゃないか、ころがってつげ義春は戦争末期に小学校上級生でしたが、そのころの魔材やネジやクギなど、ころがってたものを拾い集めて、生活を築くような世代だったんですね。あとでドラマ街、下駄など廃物に

不気味な自然

一ペーシ目の下③では草刈りのシーンですが、古びたボングがあります。次のペーシの④ではきゅうりなどが繁殖してありますが、これはただことではない、カビも繁殖してような不気味な印象をもちました。

庭の木々には小鳥が遊びに来て 朝目を覚ますと窓から朝顔のツルがそつとのぞいてい

る そんな生活を空想していたからなのだ

⑥は月並みの牧歌的な主人公の生活の夢で、このおりの生活ができてきたのかどうかあやしいですが、不気味な自然と、自分の月並みな空想とをつなぐものとしてでてくるのが、小鳥です

ね。小鳥が遊びにきている。

つげ義春の作品で不気味な自然に注目してみると、最初に出てくるのは「沼」(一九六六年)

でしょう。また「山椒魚」(一九六七年)が泳いでいる泥水ですね(図2)。このあたりが彼のもっている不気味な自然のおもしろいイメーシでしょう。泥水に腐材やら胎児やらが捨てられており、いろんなモノがつまっています。これが「紅い花」(一九六七年)になりますと、花が少女の月経というものとして、汚れて、残酷で汚く、しかしきれいだという、唐突で矛盾した結びつきになっています。花という十四、五世紀からヨーロッパ・ルネサンスで好まれて、自分をそこに同一化するような美しさの象徴としてあるものを、ここでは汚いもの残酷なものとして美しさをいっしょにして、池一面に浮かばせているという驚くべきイメーシを出しています(図3)。

水のモチーアはほかにもたくさんあって、「海辺の叙景」(一九六九年)では、女におだてられ

て男が死の海の方に泳いでいくという、これは死のイメーシとつながっているんですけども、海の水はきれいなんです。のちのつげ作品「無能の人」(一九八五年)では川の水は清冽に流れています。水はだんだんきれいなようになってくるような気がします。「季さん一家」のきゅうりが生えている不気味な自然は「沼」や「山椒魚」や「紅い花」の不気味さに通じるものですね。温暖化してゆく地球表面の変化をも暗示しています。

「生物は一般に、獣と鳥とを除いて、外界の温度が上がると活動性が高まります」と川那部浩哉氏は言っていますね。



図2

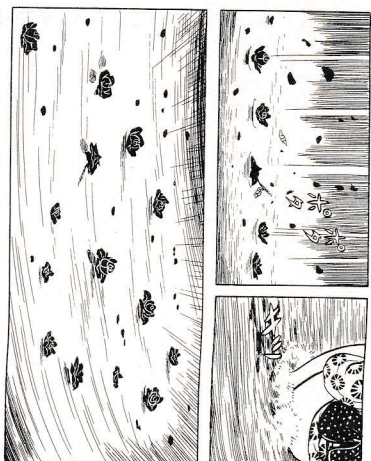


図3

そこから突如、妙なはなしになっていきます。現実的なよういて、すっとほけた感じで李さんが現れます(四ページ目⑦)。

⑦しかしわがボロ家の庭は隣接の神社の境内との境界線がおぼろげなため、しばしば見知らぬ人が迷い込んで来る境界線がおぼろげなため、という思わせぶりの言い方をしています。内と外の境界とか、日本と朝鮮の境界ということで、そこからドラマがはじまります。そしてその男の肖像がなんとも愉快ですね。

⑧男はギヤングのカボネ時代に流行ったような縞模様の薄ぎたないズボンを穿き、その尻ポケットにむりやり上衣を詰め込んでいたので、そこがものすごく出っばっていた朝鮮やアメリカからの異文化がはいりこんできてるんですね。そして尻ポケットに手ぬぐいではなく、上着を詰め込んでいる。この不細工さ。主人公は伝統的に手ぬぐいをちゃんとポケットに入れてますが……。ポケットに突っ込むというのは社会に合わない、不適応なという意味で主人公なり、つげ義春の気分につなかっていく人だろなという感じですよ。

⑨⑩そして鳥の啼き声を真似て、樹上の鳥と何やらさかんにしゃべっている様子なので僕は鳥寄せの名人かと思つた。彼は僕のほうへむき直り、「明日は南西の風で良い天気でしょう」とさつき僕がラジオで聞いた天気予報とそっくり同じ文句をいうのだ。彼は世にも稀な鳥語を話せる人間で、「いまの天気予報は樹上の雀から教えて貰つたのです」。

「明日は南西の風で良い天気でしょう」。このへんでほくは笑つてしまふのです。つまり世にも無意味なことばをしやべらすんです。この場合明日というのは予言、未来予測なんですが、小鳥から聞いたように装つて、実はラジオやマスコミから聞いたことをそのまま言つているという、何のアレゴリーかはうまく特定できませんけど。

目玉と視線

二ページ目②の主人公は伏目がちで、どこを向いているのか、なんとなく自分を隠そうとする気分なのか。③の古びたボソソの場面でも、主人公の視線はやはり下を向いています。ところがあとから出てくるおんなの子供はまっすぐな目つきです。六ページ目④に

この奥さんの笑顔はまだ一度もみたことがない。べつに怒っているわけではなく、といて表情に乏しい顔立ちでもない。目玉だけがまんなかについてますね。子供も男の子の方は目玉が丸くまんなかについてます。これにたいして、主人公も李さんも下の方を見てるんですね(⑤⑥⑦)。男は何かかくそつとしているのか、やましいことがあるのか、まっすぐ見せてませんね(⑧)。

でも鳥は話題に乏しく、たいいてい天気の話がエサの話くらいのもので、あまりリコウではないのです。つまり、コミュニケーションできるけれども、その内容はとも空虚だと告白しています。李さんは夜の仕事をしていた、外泊(?)も多い。作者と李さんと読者は不安のなかを漂いつつ、「内面化」していく気配があります。

⑨彼は朝鮮人で李さんとい、奥さんと子ども二人があるそうだが、ここではじめて作者は重要人物の紹介をします。李さん一家の肖像が出てきます(⑩)。このツガのテーマは「家族の肖像」だと思えますね。